

血友病性関節症に対する装具療法の効果と適応

神奈川県立こども医療センター

整形外科 井 沢 淑 郎

陣 内 一 保

松 山 建 宇

血友病性関節症は、血友病患者の日常生活や Rehabilitation の上に最も大きな障害をもたらすので、これら関節変化を進展させる悪循環を断ることが最も肝要である。この目的のために、われわれは装具単独療法、予防的補充療との併用療法を行い、1年以上の経過を観察し得た36例、42関節について、装具療法の効果と適応について検討した。

対象例を装具別にみると、長下肢装具（以下LLB）群13例、14関節、短下肢装具（以下SLB）群15例、18関節、肘装具（以下EB）群8例、10関節で、それぞれの平均装着期間は、16.3カ月、23.7カ月、24.1カ月、全例の平均観察期間は30.4カ月であった。なお、42関節中装具単独療用例は21関節であり、また関節症の程度は、42関節中29関節がDe-Palmaの分類によるGradeⅢであった。

装具は原則として罹患関節の制動と支持性の附与を目的とした。なお、LLBではdrop-ringをロツクしても約20度の膝関節可動域をもたせてあり、これによって廃用性筋萎縮を防ぐように企図した点に特徴がある。

装具療法の関節10出血に対する止血効果をみると、各群とも治療開始前に比して全例に出血頻度の減少を認めた。これを装具単独療用例と、予防的補充療法併用例とに分けて観察しても、前者では治療開始前の出血頻度が月平均2.4回であったものが月平均0.2回、即ち5カ月に1回に減少、後者では同じく3.4回が0.34回、即ち2.6カ月に1回に減少しており、著明な効果と思われる(図)なお、これら効果、出現時期は装着後1～3カ月であった。

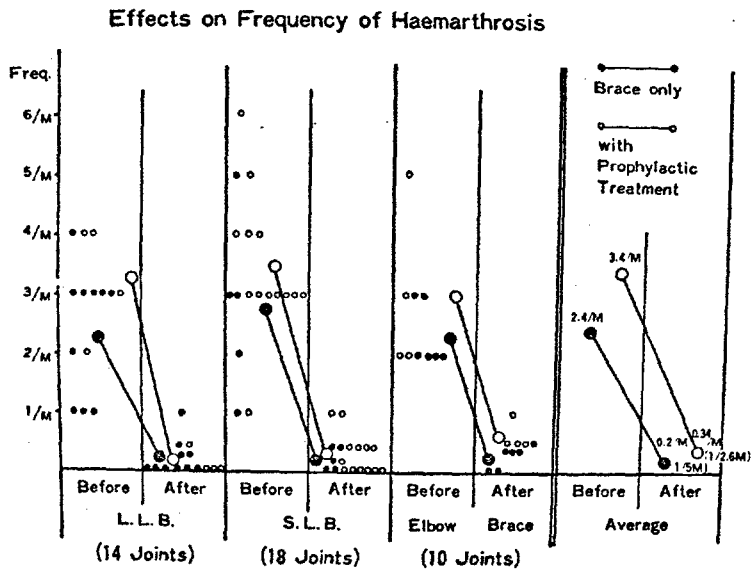
この止血効果と相俟って、X線学的者、関節変化は全例に進行の停止を認め、膝関節病へ13関節中5関節、足関節症10関節中7関節にはむしろ変化の改善がみられ、血友病性関節症の関節変化は可選性であると考えられた。しかし、GradeⅣに相当するものでは非可選的であり、この点早期に適切な治療を開始することの重要性が強調されねばならない。

なお、装具療法継続中にも罹患関節の可動域の拡大、関与筋の筋力増強傾向が認められたが、これらには同時に行っている筋力強化訓練や、止血効果による身体活動の活潑化が関与していると考

えられる。

以上の装具療法の効果より、次のものにその適応があると思われる。

1. Grade III乃至IVの如き高度の関節症。
2. Grade I、IIの如き初期の関節症でも出血頻度の高いもの、特に予防的補充療法のみでは出血のコントロールが困難なもの。
3. 罹患関節の関与筋の筋力が、徒手筋力テストで“Fair（又は3）又はそれ以下”で、関節の支持性が低下しているもの。
4. 関節症のために日常生活動作、特に起立、歩行が困難乃至不能なもの。



↓ **検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用 ↓
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

血友病性関節症は、血友病患者の日常生活や Rehabilitation の上に最も大きな障害をもたらすので、これら関節変化を進展させる悪循環を断つことが最も肝要である。この目的のために、われわれは装具単独療法、予防的補充療との併用療法を行い、1 年以上の経過を観察し得た 36 例、42 関節について、装具療法の効果と適応について検討した。